

“考古フアンのじゃれごと”

日本先史古代研究会 会員 山崎泰二

仮説 1 神武東征＝弥生のお米生産の東進化

この仮説の動機は「稲は連作が出来ない」 嘘(ウソ)!! 常識からの脱皮

今年には神武天皇から皇紀 2670 年になります。古来日本書紀・古事記(以降＝記紀と称します)の神武東征説は実在しない架空の事象としての評価が定着しているようです。文脈の個々の事例は確かに検証出来ない以上、この評価は止むを得ないのかも知れません。8 世紀の初め日本国家の基礎が固まり新しい固有の文化が輝かしく花開いているとき、記紀の編者である当時の官僚＝学者たちは、1000 年も昔で文字の記録の無いまま、先人の「口伝」のみの記憶に頼っての編纂です。多少の創作は許されるべきです。通説の多くは神武東征を 3 世紀の卑弥呼の時代に重ねているようですが、私は「神武東征＝弥生のお米生産の東進化」と素人なりに信じるようになりました。

岡山には考古学者の高橋護(たかはしまもる)先生が健在です。また吉備学会の食農部会でお世話になっている岡山大学名誉教授の景山詳弘(かげやまよしひろ)先生は農学博士の専門家で退官後は百楽塾を主宰して無農薬農業の実践指導をなさっています。最近このお二人から「目にうろこが落ちる」学びを得ました。「米＝稲は連作が出来ない代表的な植物だ!!!」とのこと。「何々、米は毎年同じ水田で 2000 年も昔から耕作している日本の代表的な穀物で、一番身近な主食でもある。連作が出来ないなんて信じられない」と叫んでしまいました。しかし高橋先生は 2009・21 年 12 月 19 日の彦崎貝塚の講座の中で考古学者としての長い実践も踏まえて「縄文人の主食の一つが米であり、それは小集団の焼畑農耕による陸稲の栽培が中心である」と説かれます。半信半疑でしたが、岡山を代表する考古学者の説です。素人の私は無条件に信じるしかありません。早速農学博士の景山先生にそのことを聞いてみました。「そのことは農学の世界では常識だよ」と簡単に肯定されます。縄文人が長い間お米を栽培していたが連作障害のため定住が出来ず、2～3 年で移住しながらそれでも他の穀物に比べると稲＝米は得がたい食材でした。一方東南アジア・現在の中国の東南部で「偶然の積み重ね」を繰り返しながら「水稲稲作が連作障害を克服する」大発見をいたします。しかし広大な大河の「水の管理」は容易ではありません。水の管理が困難なため単純な農法は最近の東南アジアでも続いています。

弥生人の登場と水耕稲作の技術革命は 2000 年後の今日まで続いている

縄文人は狩猟民族と学校では教わりました。しかし高橋先生のお話にもありましたが縄文人は多様な食生活をしていました。彦崎貝塚(旧灘崎町・現岡山市)では海岸の近くで近海の漁業をし、生活は高地に移動して住居していたそうです。山野の果実(特に栗など)や鹿やイノシシの在来の小動物も重要な蛋白源でしたが、主食は穀物で貝塚から多量の種子が検出しているそうです。中でも稲は他の穀物の中で飛び抜けて多く出土していて当時の縄文人がお米を主食の一つにしていたことが確認できるそうです。小集団(複数の家族)で焼畑農耕を続けながら移住生活をしていたのです。焼畑のためには人手が必要です。人類と共に生きた家畜の犬は鹿やイノシシからの被害を守ってくれていたのでしょう。稲は連作が出来ません 2 年目には 70%・3 年目には 50%の収穫が減ると景山先生から教えて頂きました。次の焼畑を求めて移住しかありません。連作の可能なトウモロコシや小麦の栽培も当然ありえたのに米にこだわる利点が陸稲を続けさせました。稲粳(もみ)は縄文土器で保管し移動しました。海岸での漁労が塩分を補足させ、貝や小魚は日干しにして保管していたのでしょう。貝は時代を経て「貨幣」にもなります。大切な食材でした。石と木で火を起し石包丁で調理し縄文土器で煮炊きをする多彩な食生活が想像できます。

わが国における弥生人は朝鮮半島経由と中国東南部の海洋から直接九州島に上陸したと考えられています。これらの渡来人は苦勞しながら小船(準構造船?)で漂着した九州島に、「驚きと感動」を得たのです。この東の日の出る国は山々に緑が茂り(中国や朝鮮の山は禿山が多い)小川には清らかな水が留めなく流れています。(中国の河の水は黄色が多い)河口には沃野が開けています。虎などの猛獣も居ません。水耕稲作の最適地です。早速小区画の畝(うね)や畦(あぜ)を作ります。水の管理がし易く、排水路は次の田の給水に繋がります。東南アジアの民は水の力で稲作の連作からは逃れましたが、水の管理の難しさに苦しんでいた渡来人は、この新天地に「安住の地」を得たのです。弥生人として瞬間に日本列島を「水稲文化圏」としてしまいます。弥生文化が発展した最大の武器は「水耕稲作」でしたがそれだけではありません。先に述べた「縄文人の米好き」が影の大きな原因でした。弥生人の渡来は縄文人にとって本来異質の人種で言葉も習俗も違います。衝突があっても当然ですが研究者の多くはこの両人種間の大掛かりな戦争実績はなさそうです。それには主食を「稲＝米」にしている、在来の焼畑陸稲よりは弥生人の持ち込んだ水耕稲作の方が格段に進歩した高等技術であり、縄文人は弥生人に敬服したのが真意と

私は考えるのです。日本の文化は「水の文化」「瑞々しい」＝水々しい「瑞穂の国」とドナルト・キーン博士は今日の日本を評しています。同時に記紀の世界でも「瑞穂の国」を浪々と歌い上げるのです。縄文人から見ると新来の弥生人は「天から降って沸いた」様な大変革であります。在来人から見るとまさに「天孫降臨」の世界なのです。尊敬もしますし無条件に受け入れたのは当然で、渡来早々の弥生人が指導的立場に立っていたことが伺えます。

弥生人の生活の変化

水耕稲作の最大のポイントは「水」と「太陽」であります。水のコントロールは当時の人にとって大変であったと思います。華南の広大な平地と大河川の水を制するのは困難でした。島国の日本にやってきた渡来人は小河川で水量も多く、程よい広さのある河口部から稲作が始まりました。われらが住む吉備の穴海は小河川から出た堆積で遠浅の「吉備の穴海」を形成し、小舟での移動は容易でした。種籾は土器に入れ用具は先の尖った石刀です。水の管理がしやすいように田の面積は小区画の畝と畦で作ります。微妙な土地の高低差を利用して水の再利用を計ります。土地は元々自然堆肥の有機質です。水の管理と太陽の恵み(夏の暑さ)があれば稲の豊作は間違いないのです。今も昔の変わらない雑草との戦いは当然です。外敵の野生の動物は、縄文時代から人類と共生している犬が追っ払ってくれます。穀物は高床式の倉庫で保管したのです。住居は水田の近くの小高い場所に竪穴式住居で家族・部族単位の小集落に住みました。後に環濠集落に発展するのですが初期の弥生社会は争いもなく意外と安全だったのです。岡山の津島運動公園での復元住居が当時を彷彿させてくれます。夜や冬は乏しい灯火で自分たちの衣類を織りました。樹皮を繊維にしたり、獣の皮で丈夫な衣類を作ったのです。山野に居る繭を採取してきたかもしれません。段々と知恵が働き、親かから子に伝授されて行くのです。基本の形は「貫頭衣」ですが色彩も豊かに変化したことでしょう。

弥生人の人口増加

稲は保管が出来ますし技術力や耕作の工夫次第で収穫に差が出てまいります。精を出して働けば得るものも多い時代です。しかし人間の力ではどうしようもないのが、今も変わらぬ天と地の「災い」です。神に祈るしかありません。天の神・地の神・山の神・木の神身近な物に神は宿ります。天に一番近い山には天の神・地の神が行き来する神聖な大切な場所として崇(あが)められました。その象徴が「磐座(いわくら)」として今日まで残っています。弥生人の生き生きとした社会に神話が自然発生的に生まれ、神が信じられたことでしょう。記紀の世界では人と神と自然が織り成す神代の国を朗々と語っています。

単位家族も次世代になりますと同じ場所では食材が不足します。同じ川・谷の上流や列島の東へと少しずつ北上し移動してまいります。適地を見つけて開墾し定住する。それが小さい集団として増え続ける。数百年の間に弥生文化が列島をほぼ覆います。縄文時代の1万2000年に比べると大変短く、その上弥生文化がその後の2000年の源流になっているのです。通説になっている北九州が弥生社会の原点としますと、その主な発展ルートは二つ考えられます。まず一つは瀬戸内海ルートです。吉備の地で一呼吸(記紀によると、神武天皇はその東征中に3年乃至8年吉備児島の高島に逗留)して暫時畿内へ進展していきます。もう一つのルートは日本海ルートです。出雲の地は記紀にも多くの痕跡を残します。この時期には北陸までは水稻が普及していたようです。当然出雲文化も伝播しています。四隅突出墳(よすみとしゅつふん)は出雲から北陸まで弥生末期の特殊な文化がありました。同じ様に吉備で発生した弥生末期の祭祀の仕方が「特殊器台(とくしゅきだい)」として出雲にも後の大和にも伝わっているのです。後に詳しく述べたいと思います。

稲作は高温多雨が最適です。寒さには弱いのです。東北はやや遅れましたがそれでも稲作は普及しました。稲作の北上により縄文人は同化・融合され、残った北海道にはアイヌとして縄文言葉や風習がかろうじて残っていました。南九州も隼人族系の縄文文化がしばらく残りますが歴史の進展とともに大和民族の中に融合することになります。

神武東征＝弥生のお米文化の東進化

私はこれらの時代を記紀の「天孫降臨」から「神武東征」俗に「欠史8代」とする天皇の記述時代と重ねて考えています。8世紀の優れた官僚も学者も弥生時代の目覚ましい進化発展を無視することは出来なかったと思うのです。「瑞穂の国＝大和＝日本」と歌い上げるには、近隣の中華思想に負けないでその上、先進地の朝鮮半島伝来の技術・文化を乗り越えた独自の飛鳥・奈良文化は、彼らにとっても誇り高いものでした。1300年前の平城京の今年の催しを身近に垣間見るとき当時の文化の基礎が、それから1000年前に地固めされた弥生文化(お米文化)に源(みなもと)を得ていることは平城京の役人も認識していました。

天孫降臨は騎馬民族固有の文化であり祖先は騎馬民族との説も有力です。また同じ記紀に海洋民族系の記述も多くあります。中国や朝鮮半島を経由しているうちに中国の当時新しい思想である道教や儒教の教えも騎馬民族の文化も雑多な形で渡来してきたのです。自然と共生していた在来民族はこれらの新しい文明・文化とも素早く共生・共存を計ります。文明開化の幕末から明治のようなものです。輝かしい弥生の基礎を学びました。次は弥生末期、邪馬台国卑弥呼の時代に入ります。

仮説 2 弥生晩期(1～3世紀)日本の中心は吉備だった

楯築(たてつき)墳丘墓(ふんきゅうぼ)は卑弥呼(ひみこ)の墓だ！！

岡山には戦後の考古学を常にリードされ発掘事例の実績とともに、新機軸を展開され日本を代表する考古学者である近藤義郎先生(1925-2009)と、彼の京大時代の学友である薬師寺慎一(1924-)先生・それに薬師寺先生が師と仰いで止まない郷土史の先人黒住秀雄(1913-1996)先生らの地道な研究が重ねられました。その他岡山大学や県・市の文化財関係者を中心とした、考古学・歴史研究が一定の深みを得て、我々考古歴史ファンを惹(ひ)きつけている。私もそのフアンの一人として、先に「神武東征＝弥生の水稻生産の東進化」とした仮説を立てた。今回は前項の年代に引き続く弥生末期に焦点を当て「弥生晩期(1～3世紀)日本の中心は吉備だった……楯築墳丘墓は卑弥呼の墓だ」との私なりの仮説を信じるに至りました。

弥生晩期の日本列島の様子

先に述べましたように水耕稲作は弥生人と共に、九州島に上陸してから約1000年で日本列島を席捲(せっけん)してしまいました。主に北部九州から二つのルートで移動したのですが、瀬戸内ルートの吉備は単に稲作を押しやっていただけでなく、海上航海で南九州の隼人海人と接しその南の中国揚州(江南)長江(揚子江)との交易。それから北部九州の宗像海人経由で朝鮮と交流をしていました。当然日本海ルートで今の新潟付近まで、東海は千葉の先まで海上交易を延ばしていた列島最強の国際集団でもありました。今は亡き黒住先生の論旨は後継者に引き継がれています。先生たちの説を信じれば、弥生末期に於ける列島の中心勢力は吉備にあり、畿内「ヤマト」はその次の時代の中心地になる。前段の地が吉備であったと私は信じます。

楯築墳丘墓の墳形がヤマトの箸墓古墳の原形だ！！

楯築遺跡の発掘者である近藤義郎先生は「楯築はその当時日本列島の中で弥生期最大のお墓」(＝墳丘墓と先生が命名と伺っています)と断言しておられます。その主な理由は先ず規模が当時最大の他、形状が後(のち)の前方後円墳の原形をなす円墳に両突出を持つお墓なのです。片方の突出部を取れば前方後円墳になりますね、判りやすい説明です。同じ頃日本海ルートでは出雲を中心に広島中央部・鳥取の大山の麓(ふもと)の妻木晩田(むぎばんだ)遺跡から北陸まで「四隅突出墳(よすみとしゅつふん)が点在しますが、弥生末期で断絶してしまいます。これは出雲特有の文化はこれで止まったことを意味します。しかし楯築の墳形はヤマトの箸墓古墳に引き継がれ、古墳時代の基本形である前方後円墳と繋がっていくのです。(箸墓の前にヤマトでは前期前方後円墳が存在しますが過渡的な面を持ちます)

墓は死者の埋葬だけでなく祭祀の場(楯築墳丘墓から始まる)

これは近藤先生も薬師寺先生も共通して強調しておられますのが「弥生時代の墓がこの時期から祭祀の場に変った」との説です。農耕の弥生人は自然との共生でした。当然祭祀は集落で行われました。楯築ではお墓で特別な器(うつわ)を用いた祭祀を始めたのです。特殊器台(とくしゅきだい)の登場です。(命名は前項で登場戴いた高橋護先生で平成3年3月23日の講演でお話なさっています)器台そのものは弥生時代前期から壺を置く台として生活の中で使われていたのですが、特殊器台はお墓で祭祀用に用いられた吉備発祥の特有な器台であります。年代により立坂(たてさか)型・向木見(むこうきみ)型・宮山(みややま)型と大きく3区分され共に吉備の国から発信されています。そして何よりも重要なことはこの特殊器台が楯築墳丘墓の墳形が前方後円墳の原形になったように、次々と進化してまいります。吉備で発達した特殊器台は①特殊器台②特殊器台型埴輪(はにわ)③円筒埴輪(えんとうはにわ)へと繋(つな)がり、その後の古墳時代(こふんじだい)400年間古墳の必需品として進化していくのです。この埴輪は大変重要で例えば旧山陽町の両宮山(りやうぐうさん)古墳は岡山で3番目に大きくその上2重の周壕(しゅうごう)がある有名な古墳ですが「埴輪」がありません。専門家もその理由を解明できないでいる、それほど重要なことなのです。時代を超えて繋がるものはその意義を当時の人々が認め、認識を共有していたのです。また当時弥生末期の発展地であった北九州・出雲・畿内のヤマトにこの特殊器台の祭祀の仕方が伝播した意味も重要です。単に「物」だけが移動したのではなく、吉備人が移動しそこで吉備式祭祀が行われたと想像してみてください。当時の吉備人の凄(すご)さが判ります。

なぜ弥生末期の吉備で祭祀が行われるようになったのか？

日本古来の祭祀は「磐座(イワクラ)」に代表される自然との共生でした。『天・地・山・木・石・身近な獣に神が宿りそれを大切

に崇めることにより、自分たちが神に守られる』とする自然崇拜に近い祭祀でした。その対象と祭祀の祈りは2000年後(のち)の今日まで延々と現代人の中にも受け継がれています。よってそのこと自体は目新しいことではありません。この楯築の丘の頂部には五つの巨石が立って居り、横たわっています。それ自体が異様な祭祀の雰囲気(かも)を醸し出しています。先に述べた特殊器台を使った日本列島最初の祭りが、ほぼ同じ時代に中国で流行(はや)った「道教(どうきょう)」の祭祀が執り行われたことに意義があります。このことは薬師寺先生が詳しく検証しておられます。(楯築遺跡と卑弥呼の鬼道などの書籍を参照下さい)

注 広辞苑「道教」=黄帝・老子を教祖と仰ぐ多神的宗教。無為・自然を旨とする老荘哲学の流れを汲み、これに陰陽五行説や神仏思想を加味して、不老長生の術を求め符呪・祈祷などを行う。後漢(25～220年)末の張陵を開祖とし、仏教の教理を取り入れて次第に宗教の形をととのえ、中国の民間習俗に長く影響を及ぼした。

吉備の海人は南九州から遠く中国の最新の文化をこの吉備に持ち込んだ意味は大きいと思います。他のことはヤマトでも出雲でも北九州の吉野ヶ里でも出来たでしょうが、吉備海人と吉備弥生人が稲作の「余剰米」を得てそれを、朝鮮や中国の後漢から鉄などを交易し、近くの沿岸部では製塩技術を特化し加工し、吉備地方がずば抜けた弥生集落を形成していたと柳瀬明彦吉備国際大教授は、我々に分かり易く描いて下さいます。同時代北九州の吉野ヶ里や阪南の池上・曾根の環濠集落が今日大きな話題になっていますが、吉備地域では楯築の近くの上東(じょうとう)遺跡(バラ園付近)では大掛かりな港湾施設があり吉備海人の基地の存在が覗(うかが)えます。隣接する足守川は、その昔は高梁川が今の総社市の中央を東に流れ弥生時代は伏流し幾つかの支流をなして広大な総社平野が弥生時代有力な水耕田でした。聖なる中山の東を眺めれば、旭川の河口部に津島遺跡(津島運動公園・岡大キャンパス)では驚くような木製品が豊かな弥生人の生活を彷彿とさせてくれます。昔「西の大川」と称した旭川の下流に百間川遺跡の発掘が今でも進んでいます。柳瀬先生の「吉備の弥生集落」に詳しいのですが、実はこの文をまとめた平成22年8月22日吉備国を語る会で岡山大学の山本悦子教授の講演を聞きました。先生の講演は映像を駆使され素人の我々も2000年前の吉備の里村を探訪させていただきました。江南人が発見した水稻耕作が日本列島の弥生人によって量・技術の両面で以降2000年の現代の稲作につながり、稲の連作障害を水稻耕作で克服した「弥生大発見」の事実を多くの我々は忘れていました。「弥生人は集落単位で結束し環濠集落を作り敵に備えた」とする定説に、私は吉備に当てはめるべきではないと考えています。吉備には集落連合の意味合いの強い大きな集団があり、小集落での敵対関係は少なく、それよりも中国の先進文化の「道教」「儒教」を取り入れた「祭祀」が吉備弥生人の大きな特徴なのです。それを支えたのが豊かな水耕稲作による「富」であり楯築墳丘墓を作る最大の原動力になりました。

楯築の亀石と朱(32kg)の意味

近藤先生は1976年から7次に亘る学術調査をなさりその貴重な成果を何冊か出版なさっていますから、大方の考古学ファンの方はご存知のことと思います。この二つは当時の中国の高貴な方が大変好み、我が方の女王卑弥呼も大好物でした。(もう一つ鏡もあります)さて、朱(しゅ)ですがこれは縦穴の木棺(もっかん=木で作った棺桶)に頭の部分には、4～5cmの厚さにそして足元には2～3cmの水銀朱が32kgも敷き詰めてありました。他の当時の遺物からも出土されますが多くの場合は数mg程度だそうです。当時は貴重なもので高貴な方しか手に入りません。不老長寿の薬と考えられていました。近藤先生達の科学的な調査では、出土したこの水銀朱は品質がとても良く中国産のものと判明しているそうです。

注 朱=硫化水銀 ベンガラ=酸化第2鉄(近辺で多く産出できました) 共に赤=紅色をしています

薬師寺先生は単に出土した遺物との捕らえ方だけではなく、一步進めて魏志倭人伝の記録による「景初3年(239年)に中国の魏王から卑弥呼に与えられた銅鏡100枚と真珠(水銀朱)50斤」のその朱であると論じ卑弥呼の大好物と同じものを好んだ人物がこの楯築墳丘墓の被葬者だと展開なさっています。私は本当のところ薬師寺先生は「卑弥呼がもらった」と断言なさりたいところでしょうが、流石(さすが)専門家としてそこまでは自重なさったと想定しています。

当時の中国では先にも述べましたが特別な不老長寿の薬で皇帝など高貴な方しか入手できない品物です。遠い島国か来た倭人の女王の大好物である鏡(中国では小型で単なる実用品、日本では呪術に使う貴重品)や朱(日本では不老長寿の他に呪術的に使った)を土産に贈った魏王も太腹なら、戴いた卑弥呼もそれを最大限に活用し国内の卑弥呼の傘下の長(おさ)に配りました。(鏡も同様に)それが吉備の楯築墳丘墓に32kgも出土しました。その上発掘時に近藤先生は頂部の巨石に朱の痕跡を見かけたことを正確に記録できなかつたと独り言を述べられたそうです。石は無機質ですから不老長寿とは関係ありません。薬師寺先生は親友の近藤先生のひとり言を分析して「もし巨石に紅い朱が塗布されていたならばそれは呪術⇒道教⇒卑弥呼に関係する」と結びつけて、朱は日本では呪術として大切なものであった証であると論証しています。

次にあの不思議な文様を表面すべてに施した「亀石」です。二組存在しその内一つは粉々に破壊され埋葬されていました。これは古代人が祭祀に用いた器などを破壊して破棄した事例が多く発掘され定説になっています。もう一つは現存する形で「ご神体」として今日まで大切にされて参りました。問題なのはその形状であります。例の薬師寺先生は中国の四神・五行の思想で亀の形は「玄武」(北の守り神)であり五行では水の神でありました。弥生の稲作は水と太陽です。特に水のコントロールは

弥生人の生命線です。この中国の同時代の思想が日本列島の中でも吉備の楯築にもたらされていたのです。吉備海人と弥生吉備人の連携で新進の中国の文化が多くの日本列島の民を救い尊敬されたのです。

「吉備の邪馬台(ヤマト)国と大和の狗奴国」 若井正一説

平成 22 年 6 月 26 日私の住む岡山市で全国歴史研究会本部出張イベント＝「歴史を楽しむ会in岡山」が開催され、親友の藤原辰雄氏に誘われて参加した。直前に私が近来主張している「美作後南朝＝植月御所」に関心を持って頂いた、兵庫歴史研究会の幹部 3 名をその主な史跡を案内した偶然も重なり再会を兼ねて参加したのであるが、そのとき全国歴史研究会の会員である、若井正一氏が一冊の自著を携えて参加され紹介に預かった。氏は静岡県掛川在住で大きな病院の医務局長をなさっている現役のお医者さんで私より二回り若いもしっかりした論調で吉備が邪馬台国(一般にヤマタイコクと習いましたが、氏はヤマトとルビを振っておられます)だと断言なさり、一般(通説)に南九州を指す狗奴国(クナコク)を氏は大和(ヤマト)だと主張なさっています。倭人伝によると狗奴国は邪馬台国に属さない(対峙した)国とされ、時に出雲や吉備が想定地に挙げる論者もいます。

予(か)ねて、私は『初期の段階では北部九州にいた邪馬台国の勢力が、卑弥呼の時代にはヤマトに移動(東征)していた。その後の奈良南部の発掘事例から見て箸墓古墳付近に有力な日本列島を代表する勢力が形成され、特に箸墓古墳築造は弥生吉備人の勢力が大きな影響を持っていた』と概(おおむね)そのような認識であり、記紀のヤマトビモモノ姫が、倭人伝の卑弥呼と同一である可能性も否定できないと大雑把に考えていた。しかしこのたび若井正一先生の説に接して、またもや「目にうるこ」の感動を覚(おぼ)えた次第である。氏の説は論証細部にわたり余人の入る隙が無いようにも見える。しっかりした論旨である。是非一読をお勧めします。

しかし私は岡山にて、先の近藤・薬師寺・黒住先輩たちの論説にも親しく接していて、吉備大国を信奉する吉備人として、私の頭の中で纏(まとめ)て見ると、若井先生とは少し違ってくる。それが仮説-2「弥生晩期、日本の中心は吉備であった」当時最大の墳丘墓楯築は卑弥呼の墓に違いないと信じるに至ったわけです。魏志倭人伝が考古資料として一級であっても、著作した陳寿(ちんじゅ)は残念ながら当時の日本列島を見ていません。中国から見た「日の出る国」のことを書いている。記載された島や陸路・海路や点在する国々の名前や物理的位置に違いが出るのは当然で、交流はあっても言葉が違い一方ではまだ文字もない相手(日本)でした。多くの現代の諸先生が新説を出されますがそれなりに悩みの多いことでしょう。しかし若井説のように当時邪馬台(ヤマト)国が吉備に存在し、中国から倭国の代表として評価され、一定の国際交流がありえた吉備の邪馬台国に対してそれに属さない国として畿内で実力を持っていた集団が存在することは頷(うな)ける。それが狗奴国(くなく)であると若井説は主張する。

当時の吉備海人は単に瀬戸内海だけでなく、東北アジアの制海権を押さえ、弥生水耕稲作の先進地で富を保有し、弥生文化の頂点にいた。先に見た楯築墳丘墓の遺跡の土木技術はその文化と集団(仮に吉備大国とすれば)は世界の大国である中国も無視できない。そして 248 年に死亡したとする女王卑弥呼がその生前から、吉備の中山の祭祀を司(つかさど)り最新の中国の思想である儒教と道教を吉備海人の力添えで身に付け、単に吉備地方のみならず、弥生文化の頂点に立ち、呪術を用いて列島を支配していた。彼女は当然楯築に埋葬される。倭人伝に出てくる卑弥呼を支えた弟は、今は無き楯築墳丘墓の突出した(今は水源タンク)場所に埋葬されると想定できるのである。弥生時代の終焉であります。

次の古墳時代は吉備の文化が箸墓古墳の形で引き継がれる。弥生稲作文化はこの後 2000 年の歴史を重ね、これからも続く。そしてその中核をなすイデオロギーは、吉備が何度も経験した「破綻(はたん)からの再起」に学ぶ吉備国際大学教授白井洋輔教授の年来の説に繋がります。



楯築墳丘墓 「卑弥呼が眠っていると信じている」



と熱く語る 中央石に寄り添う 筆者